Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P-439 児への垂直感染に至った体外受精・胚移植（IVF-ET）による性器結核合併妊娠の一症例

大阪市大
西尾順子，中島聡子，峯眞紀子，中井祐一郎，山枡誠一，荻田幸雄

近年の不妊治療の普及は不妊に悩む夫婦の福音となったが，いまだ多くの未解決の問題をかかえていることも事実である．私たちは従来では妊娠が成立しないと考えられていた性器結核患者のIVF-ETによる妊娠例を経験し，管理に苦慮したので報告する．症例は26歳の初妊初産婦．IVF-ETにより妊娠成立をみたが妊娠初期より38℃～40℃の発熱を認め，原因精査と種々の治療を行ったが軽快せず，特発性間質性肺炎と診断された．妊娠10週，呼吸障害が悪化しステロイドパルス療法を繰り返して軽快したが，妊娠23週，前期破水により再度入院となった．妊娠27週，発熱，間質性肺炎の再燃および胎児仮死を認め帝王切開にて973gの女児を娩出した．生後数日で児の呼吸状態は改善したが，その後頻回に無呼吸発作をおこし慢性肺疾患と考えられた．生後40日目に培養検査により結核菌が検出され，死亡に至った．児の結核の原因として垂直感染を疑い，母体月経血培養・内膜診を行った結果，性器結核と診断された．母に対しては妊娠中より行っていた抗結核薬の投与が続けられた．その1年半後に他院にて再びIVF-ETにより双胎妊娠が成立，当科に紹介された．児の先天性結核が予想されたため，院内での感染対策を整え分娩に臨むこととなったが，妊娠30週に前期破水で入院となり妊娠36週で帝王切開を施行した．幸い両児に異常は認めなかった．不妊技術の進歩により，その原因が充分に精査されないまま妊娠に至る例も少なからずある．本症例にみられるようにその結果が多くの問題を引き起こすこともあり，不妊治療に携わる際には充分な配慮が望まれる．

P-440 CDCのガイドラインを応用した腹式子宮全摘術後抗生剤投与期間短縮の試み

静岡・聖隷浜松病院[1]，香川医大[2]
青木　茂[1]，中山　理[1]，西垣　新[1]，東條義弥[1]，成瀬寛夫[1]，村越　毅[1]，松本美奈子[2]，渋谷伸一[1]，岡田　久[1]，鳥居裕一[1]

【目的】病院内での多剤耐性菌の出現や，医療費の抑制などから，術後抗生剤の投与期間を短縮する必要が有る．準清潔手術と言われる腹式子宮全摘術においても，CDCの術後感染予防ガイドライン等に沿った対策を行うことで，抗生剤の投与期間を短縮する事が出来るか検討した．【方法】平成11年5月より，平成12年8月の間に，当院にて行った腹式子宮全摘術例212例を対象とした．抗生剤投与は平成11年5月～11月の間は術後4日間投与．平成11年12月～平成12年3月の間は2日投与，4月～8月の間は1日投与とした．4日投与では従来の方法で．2日・1日投与では腟洗浄を確実に行い．ガイドラインに基づき，開腹直前に予防的抗生剤投与を行い．剃毛は中止，または，直前の電気バリカンによる除毛とした．洗い前の腹壁消毒を行い．手洗い方法も徹底した．CDCの手術部位感染の定義の規準により術後感染の有無を判定し，3群間の発症頻度を比較検討した．【成績】4日投与群88例．2日投与群44例，1日投与群80例であった．術後感染の発症頻度はそれぞれ，4日群6例（6.8%），2日群2例（4.5%），1日群8例（10,0%），であり，各群間の発生頻度に有意差は認めなかった．【結論】CDCのガイドラインに沿った対策をすることにより，術後抗生剤投与期間を短縮することが出来た．このような検討を通じて医療者間の感染予防に対する意識を高めることが出来た．

P-441 女性生殖器由来 *Escherichia coli* の分子生物学的解析

筑波大
安岡真奈，小倉　剛，松原直子，渡邉秀樹，奥野鈴鹿，藤木　豊，山田直樹，宗田　聡，濱田洋実

【目的】腸管感染症，尿路感染症，髄膜炎などの主要な起因菌である *Escherichia coli*（*E. coli*）は，従来一括して論じられてきたが，近年血清型や種々の病原因子の有無によって分類されることが明らかとなってきている．一方，*E. coli* をはじめとした細菌による妊婦の無症候性細菌尿が早産の危険因子であることや，腟内の *E. coli* の colonization が超低出生体重児の危険因子であることが注目されている．そこで本研究は，女性生殖器から分離された *E. coli* について，腸管や尿路，新生児から分離される *E. coli* と比較したその分子生物学的特徴を解析することを目的とした．【方法】平成11年5月から平成12年9月までに外来および入院患者の腟分泌物から分離されたすべての *E. coli* について，9種の *E. coli* 病原因子の解析をPCR法にて行った．ついでその結果について，尿路病原性 *E. coli*（UPEC）の解析結果と比較検討し，特に新生児髄膜炎を起こす *E. coli* で同定されている病原因子について分析した．【成績】*E. coli* が分離された検体は73検体であった．病原因子解析では，新生児髄膜炎に関連するとされる *ibe* の陽性率が32.0%と，UPECでの陽性率より有意に高かった（$p<0.001$）．また，UPECに特徴的とされる病原因子 *pap,aer* は有意に低かった（$p<0.001$）．【結論】女性生殖器から分離される *E. coli* は，その病原性がUPECと異なることが分子生物学的に初めて証明された．さらに，新生児感染症で分離される *E. coli* の reservoir となっている可能性が示唆された．

NII-Electronic Library Service